

むかしむかしのイヌの話

年末年始展示イベント「いぬ」出展作品／十二支土鈴(標本番号H142413、高さ11cm 幅5.1cm 奥行7.4cm/下左)、他7点

近藤 雅樹

民族文化研究部

戌は一と戌(ほこ)から成り、作物を刃物で刈り取り、束ね絡めること、つまり収穫をあらわす象形文字である。新春早々、縁起がいい。縁起がいいのは安産・豊穰・繁栄の象徴とされる動物のイヌも同じ。花咲爺さんの愛犬は、裏の畑で「掘れワンワン!」正直者のお爺さんに宝物を発見



させる。

むかしばなしの「花咲爺」は、もとは各地にいろんな口伝えがあったのだが、教科書にのせられたり、小学唱歌にされたりした結果、「桃太郎」と同じく今日のわたしたちが知っている以外の筋だてが忘れられてしまった。むかしむかしのイヌの名前が「ボ

子」であるはずがない。そういうえは、富山地方に伝えられていたおはなしの語りだしは「桃太郎」とそっくりだった。川で洗濯をしていたお婆さんが、流れてきた大きな桃を拾って帰り、臼のなかに入れておいた。柴刈りから戻ったお爺さんが臼のなかをのぞいてみると、桃ではなくかわいいうち犬が入っていた……。美しい香箱に入って流れてきた、海神から授かったなどというところもあった。灰を撒いたら花が咲くのではなく、雁を捕まえてためたしめでたしという結末もあった。「雁捕爺」というそうだ。

イヌは、人類がもっとも早く使役するようになった動物だと考えられている。そして、世界中で飼われている。ヨーロッパ人と接触するまでイヌという生きものを知らなかったのは、アンダマン諸島民と、一九世紀に絶滅させられたタスマニア島民だけだったという。

表紙の写真は、今年の干支にちなむ土鈴の数々(津村重一コレクション)。社寺で授かるものが中心である。上の三点は、菅田八幡宮(羽曳野市・左)、祐徳稲荷神社(鹿島市・中)、法輪寺(京都市・右)から授与される戌年の土鈴。三つめは、達磨